みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

5．広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009565

5 広報・社会連携

概観

開館40周年記念事業

2017年に開館40周年を迎えることを記念して、次世代を担う小・中学生の観覧無料化を2017年４月１日からスタートさせた。来館経験のある小・中学生を増やすことで、「みんぱく」ファンを増やし大学生・大学院生の利用へとつなげるとともに、生涯をとおして利用可能な施設というイメージを定着させることを目的とし実施し、これにより小学校団体が前年度比50％増となった。

併せて、2017年度から無料観覧日を９日から４日に変更し、無料対象を本館展示のみとした。また、展示のテーマと内容のレベルアップ等による入館者の増加を目指すという、博物館としての本来の活動を重視する方向にシフトした。

開館40周年を積極的に発信するため、記念ポスターとチラシを作成したほか、館内に40周年を記念したタペストリーを設置した。

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内の各施設と連携し、下記のさまざまな広報活動を行った。

（1）吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で１ヶ月間（９月１日～30日）、「みんぱくフェア」を開催した。体験展示や標本を模した制作物を配置するなど、研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数 25,496名）。

（2）無印良品ららぽーとエキスポシティと、開業２周年記念イベント「みんぱく・無印良品ららぽーとEXPOCITYオープン２周年記念みんぱくツアー」を２回実施した（参加者数計20名）。同店内には継続的に本館のチラシや関連書籍を陳列し、無印良品利用者に本館の活動を訴求した。

万博記念公園内の飲食店４店舗との観覧料及び飲食料等の相互割引を継続し、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

北大阪８市３町の美術館・博物館計53館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加し、会場提供した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西 2017に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

枚方市にある商業施設「枚方T-SITE」が主催する「カナダフェア」に特別協力し、教員による講演会とブース設置を行い、開館40周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去・現在・未来」の広報活動ならびに、新たな地域・層への広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」及び「フィールドワークを語る」のテーマで計10回開催した。各テーマのうち１回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを狙った（参加者数計 379名）。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」に特別協力した（産経新聞主催、20回開催、参加者数計657名）。大阪府高齢者大学校の講座（30回開催、参加者数計1,140名）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を推進した。2017年度は、新規加入１校（京都大学）、継続加入６校（大阪大学、学校法人京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学、立命館高等学校、立命館宇治高等学校、立命館守山高等学校、立命館慶祥高等学校）、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校））の申込があり、計3,351人の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載し、111件、3,179名の大学関係者が展示場を利用した。本年度は、「大学生・教員のためのみんぱく活用」をさらに広報し、大学教育における本館の共同利用を促進するため、活用方法を紹介したリーフレットを作成し、全国の大学に配布した。

初等中等教育への貢献として、大阪北摂地域の中学校６校から14名を職場体験として受け入れたほか、学校教員

を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを２回実施し、87団体 268名の参加があった。特に若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的とした学校団体（高校、大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続し、特別展の観覧者数の増加に貢献した。

インターネットによる広報活動

インターネットによる情報発信とアクセシビリティを一層向上させた。ホームページに関しては、英語トップページのレイアウト刷新やLINE等ソーシャル・メディアのシェアボタンの設置、CMSセキュリティの向上等リニューアルを重ねた。ホームページの利用者数は、訪問者数 762,592、ページビュー数 2,426,037（集計の不具合で、2017年12月19日～2018年１月11日は除く）であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月１回継続して発信している（配信数は56,264件）。

ソーシャルメディアに関しては、海外を含む発信力の強化及び若い女性を中心とした新たな客層の開拓を図るため、新たに公式Instagram（写真の撮影・加工・共有サービス）ページを開設した。既存のソーシャル・メディアの利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数 14,858（累計）、Twitter フォロワー数 39,242（累計）、YouTube 総再生回数 15,152回（2017年度）、Instagram いいね！数 2,888（累計））。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、新たに産経新聞で、各展示場の目玉となる標本資料を紹介する連載を開始した。（10月～３月、月３～４回連載計20回程度）。毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載も継続し、研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、文部科学教育通信で月２回「国立民族学博物館の収蔵品」の連載も継続し、各研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した。千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里８３７（やぁ、みんな）」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間27本）。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年16回（参加者数247名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2017年度は、テレビ19件、ラジオ69件、新聞723件、雑誌119件、ミニコミ誌224件、その他124件の各媒体総数1,278件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,409名）、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう」を46回実施した（参加者数 1,884名）。またシンポジウムを交えた「エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』上映会」（参加者数 315名）や「渡り鳥と人とのかかわり――北東アジアから考える――」（参加者数 315名）など人間文化研究機構地域研究推進事業に関連した上映会やみんぱくワールドシネマなどの「みんぱく映画会」を７回（参加者数 2,252名）実施した。この他、研究公演「めばえる歌――民謡の伝承と創造――」（参加者数 188名）や「音楽の祭日2017 in みんぱく」（参加者数のべ 5,119名）、「カムイノミ儀礼」（見学者数 265名）を実施した。この他、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなど、多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすること等によって、広く情報発信した。視覚障がい者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

その他の活動

昨年度の本館敷地内の案内誘導サインの見直しに引き続き、多様な来館者がアクセスするきっかけになるよう特別展示館横断幕および総合掲示板上部サインのデザインの検討と再作成を行った。

本年度からの小・中学生の観覧無料化による団体見学数増加に伴い、団体見学で本館を訪れた小・中学生が、家族で再来館するきっかけとなるよう、観覧料割引券の配布を試行した。試行の結果、「遠足や校外学習で来館した小・中学生が割引券を持ち帰り、館での体験を家族等に話すことで、家族と再来館するきっかけとする」効果がみられたため、来年度以降も観覧料割引券の配布を引き続き行うこととした。

高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

今後の課題

第三期中期目標・中期計画では、「社会との連携及び社会貢献」も大学共同利用機関の一つの使命となっており、本館は博物館施設という社会に開かれた装置をもつ強みを活かし、初等、中等教育も含めた一般社会への研究成果の発信を積極的に続けていくことが必要である。貸出用学習キット「みんぱっく」の運用環境を充実させるとともに、社会人の学びなおしの機会でもあるボランティア活動の運営支援も引き続き推進していくことが望ましい。

携帯型の展示解説装置「電子ガイド」については、2007年の導入後すでに10年が経過し更新が不可欠となっている。更新に向けては、一般来館者の利用用途を分析し、利用者のニーズに合った情報を提供できるユーザインタフェース等の検討が必要である。さらに展示場で展開する情報提供においては、技術の発展に伴い、情報の提供方法も幅広くなっているため、時代に合わせつつ将来的な見通しを持った取り組みも検討すべきである。

研究成果の社会還元や教育普及活動においては、長年継続してきた既存の活動に加え、各種研究プロジェクトや外部資金による研究の成果を還元する活動を促進したり、近隣諸施設と連携した活動を積極的に企画・実施したりするなど、さらなる新規事業の検討が必要である。

国立民族学博物館要覧2017

- 和文要覧　2017年７月発行
- 英文要覧　2017年12月発行

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　（2018年３月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2017年度の訪問件数は762,592件。

- **研究活動**

  研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

- **博物館展示・事業活動**

  本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

- **大学院教育**

  総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

- **データベース**

  本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月１回電子メールで配信している。2017年度の配信数は56,264部。

報道

●報道関係者との懇談会

2017年４月20日	23名（11社）	新館長挨拶、データベースの公開（ジョージブラウンコレクション）、研究こぼれ話「中国における「石毛直道研究中心（センター）」の誕生」ほか
５月18日	19名（11社）	データベースの公開（アフリカ カメルーン民族誌写真集――端信行コレクション、西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション、沖守弘インド写真データベース（英語版））、研究こぼれ話「Facebook に現れたインドの神」ほか
６月15日	14名（７社）	開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」、公開講演会「メソアメリカとアンデスの古代文明と現在」ほか
７月20日	17名（10社）	開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」、台湾文化光点計画連続講座「台湾の飲食文化」、研究公演「エチオピア高原の楽師アズマリの音楽とその世界的展開」、みんぱくワールドシネマ今年度テーマ「映像から考える＜人類の未来＞ほか
８月９日	23名（14社）	開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」報道・出版関係者向け内覧会
９月７日	５名（４社）	開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」開幕式典
９月21日	17名（10社）	開館40周年記念新着資料展示「標 交紀（しめぎ ゆきとし）の珈琲（コーヒー）の世界」、みんぱく映画会「祝宴！シェフ」、研究公演「めばえる歌――民謡の伝承と創造――」、公開フォーラム「世界の博物館2017」、開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」展示ツアーほか
10月19日	15名（10社）	開館四十周年記念式典・祝賀会及び開館40周年記念写真展「世界のフィールドからみんぱくへ」について、年末年始展示イベント「いぬ」、公開講演会「料理と人間――食から成熟社会を問いなおす」、みんぱく映画会「火の山のマリア」、7. アイヌの伝統的儀式「ミンパク オッタ カムイノミ、開館40周年記念新着資料展示「標 交紀（しめぎ ゆきとし）の珈琲（コーヒー）の世界」展示ツアーほか
11月８日	15名（８社）	開館四十周年記念式典・祝賀会
11月16日	18名（12社）	開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命（いのち）――木彫家 藤戸竹喜の世界」、新版「国立民族学博物館　展示案内」刊行について、連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタル――フィールドワークを語る」、津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース――の公開についてほか
12月21日	13名（10社）	「みんぱくバーチャルミュージアム」の公開について、みんぱく映画会「テレビジョン」、「第７回国際民俗音楽映画祭」での受賞について、年末年始展示イベント「いぬ」展示ツアーほか
2018年１月11日	５名（２社）	開館40周年記念企画展　アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命――木彫家 藤戸竹喜の世界」開幕式
１月18日	16名（８社）	開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」、みんぱく映画会「ディーパンの闘い」、みんぱく映画会・人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業　国立民族学博物館拠点 公開セミナー「渡り鳥と人とのかかわり――北東アジアから考える――」、開館40周年記念企画展　アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命――木彫家 藤戸竹喜の世界」展示ツアーほか
２月16日	12名（10社）	開館40周年記念シンポジウム「民族誌コレクションの役割とその未来――人間の理解にむけた博物館の挑戦」、公開講演会「’70年万博からみんぱくへ」、人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館

		拠点 国内シンポジウム「北の焼畑、南の焼畑――日本列島の文化を再考する」、新任紹介ほか
3月9日	28名（17社）	開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」報道・出版関係者向け内覧会
3月15日	7名（5社）	退職記念講演会（印東教授、横山教授）

●新聞等報道件数

2017年度は、テレビ19件、ラジオ69件、新聞723件、雑誌119件、ミニコミ224件、他124件、計1,278件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第475号）	2017年4月1日発行	インタビュー「吉田憲司新館長に聞く　開館40年、これからのみんぱく」
5月号	（第476号）	2017年5月1日発行	特集「手話の世界をめぐる」
6月号	（第477号）	2017年6月1日発行	特集「沖守弘インド写真データベース」
7月号	（第478号）	2017年7月1日発行	特集「異国をまとう」
8月号	（第479号）	2017年8月1日発行	特集「シーボルトの日本博物館」
9月号	（第480号）	2017年9月1日発行	特集「多様なカナダ先住民文化」
10月号	（第481号）	2017年10月1日発行	特集「デジタル化するフィールドワーク」
11月号	（第482号）	2017年11月1日発行	特集「みんぱく40周年」
12月号	（第483号）	2017年12月1日発行	特集「20世紀革命の足跡」
1月号	（第484号）	2018年1月1日発行	特集「ねこ　猫　ネコ」
2月号	（第485号）	2018年2月1日発行	特集「熊こそが原点――木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡」
3月号	（第486号）	2018年3月1日発行	特集「万博資料収集団」

みんぱくゼミナール

第467回　エジプトでイスラーム思想のテクストを読む

2017年4月15日

講　師　相島葉月

受講者　164名

内　容　思想研究の主たるアプローチはテクスト分析であるが、著者の手を離れた後、テクストの意味は誰のモノになるのか。エジプトの事例より思想研究への人類学的アプローチを考えた。

第468回　心地よい暮らし（エイジング・イン・プレイス）――コミュニティをつなぐアーミッシュたちの暮らしから

2017年5月20日

講　師　鈴木七美

受講者　200名

内　容　高齢者をはじめ人びとが孤立せず心地よく生活できる地域コミュニティデザインのキーワードとして注目されている「エイジング・イン・プレイス」について、コミュニティに生きる意味を問い続けてきた米国アーミッシュたちの暮らしから考えた。

第469回　つくられる移民

2017年6月17日

講　師　三島禎子

受講者　210名

内　容　近年アフリカからヨーロッパへ渡る人びとに注目し、フランスをはじめとするEUの移民政策や、先進各国の移民の定義の差異について概観しながら、「移民」という存在について考えた。

第470回　ネパールの楽師カースト・ガンダルバの現在
2017年 7 月15日
講　師　南 真木人
受講者　192名
内　容　ここ30年の間に、弓奏楽器サランギを奏で、なりわいとしてきたガンダルバの人びとの演奏活動や暮らしがいかに変化してきたのかを、映像を交えてお話しし、ガンダルバの現在を考えた。

第471回　シーボルトの日本展示と博物学【開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」関連】
2017年 8 月19日
講　師　日高　薫（国立歴史民俗博物館教授）
野林厚志
園田直子
受講者　300名
内　容　日本の文化や自然に関わる膨大な資料をヨーロッパに持ち帰り研究をすすめたシーボルトの日本研究を、コレクションで重要な位置をしめる漆工芸から、博物学研究を『日本動物誌』からさぐった。

第472回　多文化主義の国カナダにおける先住民文化【開館40周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力」関連】
2017年 9 月16日
講　師　岸上伸啓
受講者　203名
内　容　2017年に建国150周年を迎えたカナダの多様な先住民文化の歴史と現状を、国家との関係に着目しながら紹介した。

第473回　ジョージ・ブラウン・コレクションの軌跡をたどる
2017年10月21日
講　師　林　勲男
受講者　125名
内　容　みんぱくが所蔵するジョージ・ブラウン・コレクションをめぐる遺族の葛藤、所蔵博物館の危機、コレクションの転売・分散、そして新たなプロジェクトなど、約100年の歴史について講演した。

第474回　仮面の世界をさぐる――アフリカ、そしてミュージアム
2017年11月18日
講　師　吉田憲司
受講者　203名
内　容　自身の、1975年に始まる、仮面をめぐる、日本で、アフリカで、そしてミュージアムでのフィールドワークの軌跡をつづり、仮面という装置の文化の違いを超えた成り立ちについての理解を得るまでのプロセスをたどった。

第475回　オラン・アスリの家族――母系制・妻方居住・一夫多妻
2017年12月16日
講　師　信田敏宏
受講者　152名
内　容　母系制や妻方居住、一夫多妻など、マレーシアの先住民オラン・アスリの家族の特徴を紹介しながら、家族とは何かについて考えた。

第476回　木彫り熊からアートモニュメントまで
【開館40周年記念企画展　アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命――木彫家 藤戸竹喜の世界」関連】
2018年 1 月20日
講　師　五十嵐聡美（北海道立近代美術館）
貝澤　徹（木彫家）

岡田恵介（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）
齋藤玲子
受講者　204名
内　容　10代で熊を彫り始め、80歳の年にJR札幌駅のアートモニュメントのメインとしてアイヌの長老の像を制作した藤戸竹喜氏の作品の魅力について語った。

第477回　ヒュードロドロの系譜――この世ならざるものの出現にともなう音
2018年２月17日
講　師　山中由里子
受講者　198名
内　容　伝承、文学作品、映像取材などをとおして、儀礼や芸能などにおいてこの世ならざるものが登場する際に重要な役割を果たす怪異の音の系譜を解説した。

第478回　万博資料収集団――太陽の塔に集った仮面、神像、なりわいの道具
【開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」関連】
2018年３月17日
講　師　野林厚志
受講者　258名
内　容　大阪万博を２年後に控えた1968年、世界の諸民族の資料を収集するというミッションが与えられ、限られた予算と時間とのなかで世界に挑んだ若き人類学徒たち「万博資料収集団」を紹介した。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

第459回　2017年４月２日　身近な素材、貴重な素材――台湾原住民族のビーズの多様性
講　師　野林厚志
受講者　106名
内　容　台湾の先住民族である台湾原住民族が、ガラス、陶器や土器などのセラミック、メノウなどの準貴石、貝殻、動物の骨、歯、角、ジュズダマ、トウアズキ、竹、ショウブ等の植物と、実にさまざまな素材のビーズを使用してきたことを紹介し、現代の台湾のビーズ工芸を考えた。

第460回　2017年４月９日　北アメリカ先住民とアイヌのガラスビーズ利用
講　師　齋藤玲子
受講者　87名
内　容　両地域ともガラス製のビーズや玉は自製ではなく、ある時期から交易によって入ってきたものである。美しさばかりでなく、富を象徴するものとして、あるいは呪術的な力を持つものとしてガラス玉がそれぞれの文化でどのように受容されたか、特別展示場で解説した。

第461回　2017年４月16日　世界のビーズ、日本のビーズ
講　師　池谷和信
受講者　109名
内　容　ビーズは、現在、地球のすみずみまでに広がっている。しかしながら、世界各地の状況をよくみると、ビーズ好きの民族とそうでない人びとがいる。日本人は、いったい、どちらのグループに入るのか。10万年のビーズの歴史をふまえて、日本人にとってのビーズの社会的、文化的意味について考えた。

第462回　2017年４月23日　みんぱくの展示資料を守る
講　師　日髙真吾
受講者　44名
内　容　みんぱくでは、露出展示が採用されている。露出展示は、資料を直に観覧できることから、その質感や風合いなどを良く感じることができる。その一方で、露出展示は、災害などで転倒したり、落下したりする事故も想定しなければならない。今回は、このようなリスク対応の取り組みを紹介した。

第463回　2017年４月30日　「異教徒の地」と「光の地」――パキスタン・アフガニスタンのカタ人とカラーシャ人
講　師　吉岡　乾
受講者　78名
内　容　パキスタンとアフガニスタンとにまたがって延びるヒンドゥークシ山脈。その山中には「光の地」と呼ばれる地域がある。かつて「異教徒の地」と呼ばれていたその地域に暮らす、カラーシャ人とカタ人という民族とその文化を、映像を交えて紹介した。

第464回　2017年５月７日　華僑の移住と暮らし――タヒチ
講　師　河合洋尚
受講者　32名
内　容　タヒチでは首都・パペーテを中心に多くの華僑・華人が住んでいる。なかでもタヒチの華人の大半は客家であり、彼らは現地の経済や文化に大きな影響を及ぼしている。タヒチの客家の移住、食文化、文化復興などについて紹介した。

第465回　2017年５月14日　豊かな高齢期とナラティヴ
講　師　鈴木七美
受講者　26名
内　容　語り、物語などを意味するナラティヴを素材とする交流は、高齢期のウェルビーイングに資する活動として注目されている。ここでは、スイスの多世代対象生活コミュニティで紡がれるナラティヴと、人びとのエイジング・イン・プレイスや新しい地域文化創出を考えた。

第466回　2017年５月21日　マランガン儀礼と彫刻――ジョージ・ブラウン・コレクションから
講　師　林　勲男
受講者　62名
内　容　オセアニア展示場の「外部世界との接触」には、民族学の研究者でもあった宣教師・ジョージ・ブラウンが収集した仮面や彫像が展示されている。これらが使用されるマランガン儀礼については秘密の部分もあるため、なかなか調査は難しいようである。現在まで明らかとなっている儀礼の様子と、使われる彫刻について紹介した。

第467回　2017年５月28日　新しい東南アジア展示場ができるまで――生業と寺院を中心に
講　師　平井京之介
受講者　40名
内　容　2015年３月にリニューアル・オープンした東南アジア展示場について、担当した生業と寺院のコーナーを中心に、展示企画の立案から、展示資料の収集、そして展示の実現とその後の改良まで、展示という作業の魅力と難しさについて紹介した。

第468回　2017年６月４日　直前解説――音楽の祭日を100倍楽しむ法
講　師　出口正之
受講者　29名
内　容　みんぱく恒例の「音楽の祭日」（本年は６月18日に実施）は、夏至の日近くに音楽をみんなで楽しもうという企画である。今年もたくさんの音楽が集まる。なぜ、これだけ多様な音楽がみんぱくに集まるのか考えた。

第469回　2017年６月11日　民家調査のい～ろ～は――建築人類学者はなにをめざす
講　師　佐藤浩司
受講者　31名
内　容　人類学の基本はフィールドワークにある。でも、海外のフィールドに出かけて人類学者はいったいなにをしているのか？私の専門である建築調査のあれやこれや、目的と方法、機材と実践、そして肝心の心構えについて、調査の苦心談をまじえて紹介した。

第470回　2017年６月25日　世界都市ランキングと大阪

講　師　太田心平

受講者　31名

内　容　都市のランキングは、誰がどうやって決めているのか。そもそも都市と都市でない場所は、何がどう違うのか。考えてみれば分からないことばかりである。現代の都市がもつ特徴と、現在に都市に求められている未来像を、大阪を例に交えながら、みなさんと一緒に考えた。

第471回　2017年７月２日　南アジアのクリケット文化

講　師　三尾　稔

受講者　32名

内　容　イギリス生まれの球技クリケットは、南アジア各国に根づき、今では国民的娯楽となっている。日本では知られていないが、W杯の強国も南アジアに数多くある。競技や人びとの楽しみ方の簡単な解説をとおして、南アジアのスポーツ文化の一端を紹介した。

第472回　2017年７月９日　イコンからガラス絵へ

講　師　三島禎子

受講者　30名

内　容　ヨーロッパにおいてキリスト教の聖画像として生まれたイコンは、サハラ砂漠を越えてアフリカのイスラーム地域で独特の発展を遂げた。画法も描写する対象も変化したガラス絵は、現代のアフリカ社会の諸相を物語っている。二つの地域のガラス絵を見比べて、モノの伝播と人の移動について考えた。

第473回　2017年７月16日　チュルカナスのやきもの

講　師　齋藤　晃

受講者　23名

内　容　南米ペルー北部のチュルカナスでは、1970年代、古代の土器づくりの技法を取り入れた新しいやきものが誕生した。現在ではペルーを代表する土産物のひとつとなったこの古くて新しいやきものの成立事情と現状を、本館に展示されている作品を紹介しながら説明した。

第474回　2017年７月23日　ジャワ島のガムランのリズム

講　師　福岡正太

受講者　55名

内　容　東南アジア展示場の出口付近に、インドネシア、ジャワ島のガムランとよばれる合奏音楽を例にして、東南アジア音楽のリズムを体験するコーナーがある。大小いくつかのゴングを実際にならしながら、一緒にリズムを体験した。

第475回　2017年７月30日　タンディル――ウズベキスタンのパン焼き釜

講　師　寺村裕史

受講者　31名

内　容　中央・北アジア展示場には、タンディルとよばれるパン焼き窯の復元模型が展示されている。展示場のタンディルはすでに「完成」した状態のものだが、実際に現地では、どのように作られ、設置されているのか？ 窯の製作からパン焼きまで、タンディルの裏側を紹介した。

第476回　2017年８月６日　変化するイタリアの結婚

講　師　宇田川妙子

受講者　25名

内　容　近年フランスでは婚外出産が全出産の半数を超え、ヨーロッパの各地では、制度としての結婚が衰えつつあるという。その傾向は、家族主義的でカトリックの強いイタリアでは非常に低いといわれていたが、2000年以降、大きく変わってきた。その変化をとおして、結婚とは何かを考えた。

第477回　2017年８月20日　太平洋の探検家朝枝利男――その生涯と資料について
講　師　丹羽典生
受講者　19名
内　容　アメリカの調査チームのメンバーとして戦前の太平洋地域を幅広く航海し、写真に収めた日本人がいた。本サロンでは、アメリカでは画家、写真家、博物館の学芸員として知られているものの、日本では忘れられた朝枝利男の生涯と写真について紹介した。

第478回　2017年８月27日　開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」――みんぱくでの展示の工夫
講　師　園田直子
受講者　64名
内　容　ミュンヘン五大陸博物館のシーボルト・コレクションおよびシーボルトの末裔にあたるブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵の関係資料をとおし、シーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえった。ここでは、展示の概要説明とともに、展示をまもるための工夫を紹介した。

第479回　2017年９月３日　アラビアコーヒーにみるアラブ世界のおもてなし文化
講　師　西尾哲夫
受講者　47名
内　容　「寛容の象徴」という「アラビアコーヒー」が、ユネスコの人類の無形文化遺産になった。砂漠でベドウィン（アラブ遊牧民）のテントを見つけてあいさつに行くと、かならずコーヒーが出てくる。アラブの人びとのもてなしの文化について考えた。

第480回　2017年９月10日　南アジア展示「生態となりわい」の見どころ
講　師　南 真木人
受講者　36名
内　容　南アジア展示の「生態となりわい」コーナーにおいて、展示している標本資料を取り上げて展示の意図や収集の裏話などを紹介し、展示の背景と伝えようとしていることについて話した。

第481回　2017年９月24日　アジアの婚礼――祝福のかたち
講　師　韓　敏
受講者　46名
内　容　結婚は、人生のもっとも重要な通過儀礼の一つである。みんぱくの展示場からは、男女の結びつきをめぐるアジア各地の多彩な儀式とさまざまな祝福をうかがうことできる。婚礼用品をとおして、結婚当事者、その周囲の人間関係および自然の摂理への配慮と気持ちを考えた。

第482回　2017年10月１日　1962年、世界をめぐる旅
講　師　信田敏宏
受講者　28名
内　容　展示場にある絵画「朝陽アンコール」の作者・大熊峻は、1962年、伊谷賢蔵画伯と共に、中南米とヨーロッパを旅した。後に世界遺産に登録された美しい町並みや建築物などの写真やスケッチ、そして旅日記を振り返りながら、当時の世界に思いを馳せた。

第483回　2017年10月８日　島に住む人類
講　師　印東道子
受講者　55名
内　容　オセアニアの楽園環境は、人類が作り出したものである。本来は食用資源が貧弱だった島に、タロイモやパンノキなどを移植し、年間を通じて食糧が確保できる環境へと作り変えた。収穫のない季節を乗り切る方法など、島環境にすむ人類の知恵と工夫を紹介した。

第484回　2017年10月15日　ペルーの文化遺産を守る

講　師　關　雄二

受講者　16名

内　容　南米アンデス文明の遺跡は、人口増や都市化の影響で破壊が進んでおり、保存は容易ではない。日本調査団は、これまで文化遺産周辺で暮らす人びとと協働でこれに対処してきた。今回は、近年調査しているペルー北高地パコパンパ遺跡における活動を紹介した。

第485回　2017年10月29日　フィールドワークとケガ――ベトナム西北部調査より

講　師　樫永真佐夫

受講者　５名

内　容　初めての長期のフィールドワークに向かう、わくわくとどきどきの道すがら、バイクで転倒した。足と心に傷を負い、足を引きずりながら、フィールドワークが始まった。でも、ケガをしたことによって見えてくる社会や文化の局面もあるのではないだろうか。

第486回　2017年11月５日　カザフの天幕――住居から祝祭の空間へ

講　師　藤本透子

受講者　23名

内　容　中央アジアの広大な草原で移動式の住居として使われていた天幕は、カザフ遊牧民が定住化した現在では主に祝祭や儀礼のために使われるようになっている。天幕に反映された世界観や死生観、天幕の使用方法などをとおして、カザフ社会の変容を考えた。

第487回　2017年11月12日　心の扉を開ける鍵としてのコーヒー――パレスチナ・イスラエルでのフィールドワークから

講　師　菅瀬晶子

受講者　19名

内　容　アラブから世界に伝播したコーヒーは、今もアラブの食文化において重要な役割を果たしているが、その飲み方や嗜好は時代とともに変遷している。パレスチナ・イスラエルの事例から、中東におけるコーヒーの今を紹介した。後半は新着資料展示「標交紀の珈琲の世界」のギャラリートーク。

第488回　2017年11月26日　博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産

講　師　飯田　卓

受講者　30名

内　容　民族誌博物館は、くらしに息づく有形の文化遺産を保存し展示する役割を担っている。いっぽう、伝統的建造物群保存地区や文化的景観、無形文化遺産など、くらしの場で保存される遺産も少なくない。両者をふまえて、くらしに関わる文化遺産の問題を考えた。

第489回　2017年12月３日　カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来

講　師　岸上伸啓

受講者　51名

内　容　2017年７月１日にカナダは建国150周年を迎えた。カナダ先住民は、同国の先住民政策の影響を強く受けつつ、独自の文化を継承したり、新たに創りだしたりしてきた。多様なカナダ先住民文化の歴史と現状について、企画展示を見ながら紹介した。

第490回　2017年12月10日　「仕立物いたします」

講　師　森　明子

受講者　20名

内　容　ヨーロッパ展示場にある裁縫アカデミーと仕立て職人の免状はライプチヒの女性のものである。仕立は専門店が扱う専門職であると同時に、市井の女性の内職仕事でもあった。ドイツで産業化の初期にあらわれた家内工業と、それを支えた女性たちについて紹介した。

第491回　2017年12月17日　目に見えない世界を歩く――「全盲」のフィールドワーク
講　師　廣瀬浩二郎
受講者　45名
内　容　2017年12月、拙著『目に見えない世界を歩く』（平凡社新書）が刊行された。新著の内容を紹介するとともに、視覚障害者が本を書く際の工夫などについて話した。「全盲」とは単なる障害ではなく、マジョリティと異なる生き方（行き方）をもたらす異文化である。ある全盲者の半生をいっしょにフィールドワークした。

第492回　2017年12月24日　みんぱくシンボルマークをえがく（再）
講　師　山本泰則
受講者　16名
内　容　みんぱく開館40周年にあたる2017年、「みんぱくシンボルマーク」について話した。このマークは一見単純そうな形に見えるが、実際にえがいてみると思わぬ発見があった。そんなエピソードや、創設当時のマークの原版、リニューアルしたマークなどを見ながら、ふたたび、みんぱくシンボルマークに迫った。

第493回　2018年１月７日　「数」をあらわす――音声言語と手話言語
講　師　菊澤律子・相良啓子
受講者　30名
内　容　数（かず）を表す表現に焦点をあて、前半は音声言語で１から10まで数えるときに同時につかう手の表現、後半は、世界のさまざまな手話言語の表現について話した。ジェスチャーと手話言語はどのように異なるのか、世界各国の言語の映像を見ながら説明した。

第494回　2018年１月14日　トナカイの角
講　師　卯田宗平
受講者　32名
内　容　中国東北部・大興安嶺森林地帯ではトナカイの飼育を続ける人びとがいる。彼らはトナカイを屠殺することはなく、毎年生え替わる角を採取し、販売している。本発表では、いまでも中国においてトナカイの飼育を続けることができる理由を解説した。

第495回　2018年１月21日　音楽を展示する試み
講　師　寺田吉孝
受講者　35名
内　容　世界には数多くの楽器博物館があるが、音楽は展示することが難しいため、音楽博物館はほとんどない。2010年にリニューアル・オープンしたみんぱくの音楽展示が、どのように企画・立案され、どのような特徴をもつのかを紹介した。

第496回　2018年１月28日　フィールドワークの醍醐味――雲南省大理での30年を通して
講　師　横山廣子
受講者　41名
内　容　中国雲南省の大理盆地でフィールドワークを始めて30年以上が過ぎた。当初、驚いたり、戸惑ったりしたことが後から考えれば、研究上の収穫をもたらした。そうした経験と、同じ村に通い続けているからこそ見えてきたことについて話した。

第497回　2018年２月４日　優しいチョコレートとはなにか？――倫理的な消費入門
講　師　鈴木　紀
受講者　22名
内　容　フェアトレードやエシカル（倫理的）トレードなど、消費を通じて生産者を支援する方法が工夫されている。チョコレートとその原料のカカオに注目しながら、そうした倫理的な消費の仕組みを検討し、私たちの優しい気持ちがどのようにカカオ生産者に届くのか考えた。

第498回　2018年２月11日　一神教と多神教――宗教学からみた世界の宗教
講　師　新免光比呂
受講者　72名
内　容　ユダヤ教、キリスト教、イスラームなどは一神教と呼ばれる。一方、ヒンズー教や神道は多神教といわれる。この違いは何か。仏教はどちらなのか？ 世界の宗教について考えた。

第499回　2018年２月18日　日本の文化の展示場（祭りと芸能）から
講　師　笹原亮二
受講者　35名
内　容　みんぱくの日本展示場の祭りと芸能のコーナーには、全国各地の様々な祭りや芸能に関わる資料が展示されている。今回は、太鼓台や曳山など、特に大型の造形物に焦点を当てて、祭りにおける役割などを考えた。

第500回　2018年２月25日　木彫家 藤戸竹喜の世界
講　師　齋藤玲子
受講者　67名
内　容　旭川を拠点に木彫り職人として活躍した父、幼少時に育ててくれた祖母、才能を見いだし仕事を任せた阿寒湖の人びと。藤戸竹喜氏の生い立ちから、北海道を代表する作家としての近年の活動までを紹介した。講話のあと、企画展示場での解説をおこなった。

第501回　2018年３月４日　イスラーム教育における音と文字
講　師　相島葉月
受講者　57名
内　容　イスラーム教育の基礎は原典の暗記にある。聖典クルアーンに始まり、預言者ムハンマドの言行録（ハディース）にうつる。エジプトでは暗記中心の学校教育が批判されて久しいのに対し、一般の信徒であっても原典の音に親しむことが重視されている理由を探った。

第502回　2018年３月11日　特別展「太陽の塔からみんぱくへ」――東南アジアを中心に
講　師　平井京之介
受講者　52名
内　容　いまから50年前、大阪万博の太陽の塔内で展示する民族資料を集めるために、20名弱の若手研究者からなる収集団が結成された。彼らの収集は、その後、みんぱくの設立にもつながった。東南アジアを中心に、収集団の活動について、特別展をみながら紹介した。

第503回　2018円３月18日　博物館資料情報の再収集 EEM 北米資料とソースコミュニティとの「再会」
講　師　伊藤敦規
受講者　21名
内　容　約半世紀前に収集された EEM 資料（北米）は、現在でも物質的にはその姿をとどめている。収集者の日記や旅程から、収集の意図と来歴を辿ることも可能である。ところが資料情報はほとんど残っていない。資料の文化的生命力の回復のために実施した、ソースコミュニティによる熟覧調査を紹介した。

第504回　2018年３月25日　カーストの歴史的変化――あるバラモン集団の事例
講　師　松尾瑞穂
受講者　29名
内　容　インド・ヒンドゥー社会を特徴づけているカーストという社会制度は、歴史的に大きな変化を経て今日のような姿になったと考えられている。西インドのバラモン・カーストであるチットパーヴァンという集団を事例に、近代以降の同集団の変容について紹介した。

研究公演

「めばえる歌――民謡の伝承と創造――」

2017年11月11日

司会・解説　川瀬　慈

出　演　井上博斗
松田美緒
山口亮志
山城大督
吉田國俊

参加者　188名

内　容　徳島県祖谷の民謡、岐阜県郡上のわらべ歌等の伝承と再創造に携わる人びとの活動に着目して制作した映像民族誌『めばえる歌――民謡の伝承と創造――』を上映し、出演者である井上博斗氏、松田美緒氏による民謡とわらべ歌の実演をとおして、民謡の今日の動態や音楽文化の継承と創造について考えた。また、映像作品の制作手法や制作の舞台裏をテーマにしたトークセッションをおこなった。

みんぱく映画会

2017年９月９日

エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』上映会

シェリーフ・エル＝ベンダーリー（映画監督）
相島葉月
飯泉菜穂子
川瀬　慈

参加者　315名

内　容　エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』を上映し、シェリーフ・エル＝ベンダーリー監督と、長年エジプトで調査を行ってきた研究者を迎え、本作品から垣間見える、2011年の「アラブの春」以降、非常を日常として生きるエジプトの若者の現在についてのトークを行った。

2017年10月14日

台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る「祝宴！シェフ」

司会・解説　野林厚志

参加者　337名

内　容　台湾映画「祝宴！シェフ」を上映し、食文化だけでなく、台湾社会が抱える格差問題、食の安全、台湾人意識といった映画に見え隠れするテーマについて解説した。

2018年２月11日

渡り鳥と人とのかかわり――北東アジアから考える

司　会　池谷和信

登　壇　樋口広芳（東京大学名誉教授）
今井友樹（映画監督）
卯田宗平

参加者　315名

内　容　「渡り鳥」に注目し、映画「鳥の道を越えて」の上映、講演、討論をとおして日本を含めた隣接地域における新しいつながりのあり方、鳥と人のかかわり方の現在を紹介し、鳥そのものがかかえる問題と同時に、鳥にかかわる各地域の文化の問題、人間と鳥との共存の形について考えた。

みんぱくワールドシネマ　映像から考える＜人類の未来＞

＜人類の未来＞をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施。

2017年９月18日
「おみおくりの作法」
司　会　鈴木　紀
解　説　菅瀬晶子
参加者　403名
内　容　イギリス・イタリア合作「おみおくりの作法」を上映し、孤独死を遂げた人を、できる限りの誠意を尽くして“おみおくり”する仕事に臨んできた民生係のジョンの姿を通して、人間関係が希薄になりつつある現代社会の中で、さまざまな人生を歩んできた人びとの尊厳ある生と死について考えた。

2017年11月５日
「火の山のマリア」
司　会　鈴木　紀
解　説　八杉佳穂
参加者　284名
内　容　グアテマラ・フランス合作「火の山のマリア」を上映し、グアテマラの高地に暮らす17歳のマヤ人のマリアの運命を通して、現代社会における先住民族マヤの問題を考えた。

2018年２月10日
「テレビジョン」
司　会　菅瀬晶子
解　説　南出和余（桃山学院大学国際教養学部准教授）
参加者　302名
内　容　バングラデシュ映画「テレビジョン」を上映し、厳格なイスラームを遵守するバングラデシュの小さな村の騒動を通して、宗教と現代文明のあり方を考えた。

2018年３月10日
「ディーパンの闘い」
司　会　鈴木　紀
解　説　杉本良男
参加者　296名
内　容　フランス映画「ディーパンの闘い」を上映し、戦火のスリランカから逃れ、フランスで新しい生活を始めた“偽装家族”を通して、難民の状況について考えた。

博物館社会連携

●学習キット「みんぱっく」

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。みんぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2018年３月現在で13種類22パックを用意している。

名称	個数	2017年度貸出件数	2017年度利用者数
極北を生きる	2	16	1,869
アンデスの玉手箱	2	31	3,215
ジャワ島の装い	1	12	1,472
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	17	1,767
ソウルスタイル	2	22	2,914
ソウルのこども時間	2	16	1,719
インドのサリーとクルター	2	20	2,039
ブリコラージュ	3	4	309
アラビアンナイトの世界	2	19	2,683
アイヌ文化にであう	1	10	1,236
アイヌ文化にであう２	1	13	731
モンゴル	2	29	3,409
あるく、ウメサオタダオ展	1	6	698

●ワークショップ

夏休みこどもワークショップ「イスラームの人びとの衣装を知ろう――フィールドワークに挑戦！」

実施日：2017年７月22日（土）

講　師：菅瀬晶子

参加人数：７名（対象：小学４～６年生）

展示場でフィールドワークを行い、調査したことや講師から聞いたことなどを報告書にまとめて発表した。

開館40周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」関連ワークショップ「カナダ先住民のアートを作ろう」

開催日：2017年10月１日（日）「カナダ北西海岸先住民のワタリガラスの仮面を作ろう」
　　2017年11月５日（日）「カナダ先住民イヌイットのステンシル版画を作ろう」

講　師：田主　誠（版画家）
　　岸上伸啓

参加者：10月１日　17名
　　11月５日　16名

開館40周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」に関連したワークショップ。ワタリガラスの仮面やステンシル版画を身近な道具で再現し、カナダ先住民の文化について理解を深めた。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんぱく見どころアラカルト」や、年末年始展示イベント「いぬ」関連ガイドマップなど、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。

また、全展示場の新構築完了を受け、新しい展示場に対応するワークシートの制作に着手しており、本年度はデザインの検討を行い、プロトタイプを制作した。また、小学校に協力を依頼し、遠足で来館した小学生に開発中のワークシートを使用してもらい、アンケートにより使用感等の調査を行った。

●アウトリーチへの取り組み

近年、本館が実施するワークショップのアウトリーチ活動への要望が館の内外から増えてきたのを受けて、本年度、館外の施設で実施可能なワークショップ開発をおこなった。大人数の参加者にも対応できるようなプログラムを検討し、館内で学校団体向けに試行した後、館外での実施に向け問題点を整理したうえでプログラムの改良をおこなった。そして試験的に熊本県立装飾古墳館にて開催された「ミュージアムキッズ！全国フェア2017」に出展し、その試行結果に基づき、今後アウトリーチ活動を行う際の条件等を検討した。

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習　事前見学＆ガイダンス

春のガイダンス　2017年４月４日（火）、６日（木）

秋のガイダンス　2017年８月22日（火）、25日（金）

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には48団体143名、秋には37団体125名、計85団体268名の学校関係者が参加した。当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2017年10月26日（木）～11月17日（金）

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2017年度は６校16名を受け入れた。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2017」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2017 in みんぱく」

実施日：2017年６月18日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は25のグループや個人の演奏があった。

●展示場クイズ「みんぱＱ」

クイズ「みんぱＱ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。2017年度は、特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」の関連事業として、「みんぱＱ　特別展編」を2017年８月10日（木）～2017年10月10日（火）に実施した。また、学校が冬期休業を迎える時期に合わせ、2017年12月21日（木）～2018年１月30日（火）に、本館展示の新構築フォーラムで実施した「みんぱＱ」の中から「衣・食・住」に関する問題を集めた「みんぱＱ　総集編」を実施した。

●カムイノミ

実施日：2017年11月30日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。以前は萱野　茂氏（故人）を祭司に非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2017年度は八雲アイヌ協会及び苫小牧アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2017年11月18日（土）、11月19日（日）に、北大阪の８市３町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、無形民俗文化財の披露等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を、上半期は特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」の関連事業として、下半期は「フィールドワークを語る」をテーマに合計10回（うち２回は展示ツアー）開講した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年９月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2017年度は、総勢160名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会（５回）、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」（５回）をおこなった。さらに、新規メンバーに対しては活動にあたり必要な知識を得るための研修（全５回）を実施し、そのうち１回は外部講師を招き既存メンバーも対象とした研修を行った。

以上の支援により、MMPは、本年度、展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を26回（案内数 292名）、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」を15回（プログラム参加者数 1,046名）、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ（「点字体験ワークショップ」12回、年末年始展示イベント「いぬ」におけるワークショップ３回、その他のワークショップ６回）を実施した。また、開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」の体験コーナーにおいては、9,000人を超える観覧者のプログラム体験をサポートした。さらに、館外で開催されたボランティアフェスタへも参加するなど、館外での活動にも積極的に取り組んでおり（ワークショップ７回）、博物館を起点とした社会との連携を推進している。

また、2017年４月１日の本館の改組にともない、「国立民族学博物館におけるボランティア活動に関する覚書」の内容を変更する必要が生じたため、これまでのMMPの活動のなかで本館との間で決められた事柄などを詳細事項として新たに作成した上で覚書を再締結した。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館　セミナー室（毎月第１土曜日開催）

第465回「つなぐ・かざる・みせる――ビーズにさぐる人類の多様な営み」
【開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」関連】

2017年４月１日　講師　池谷和信　参加人数　45名

人類がおよそ10万年前に生み出して以来、世界の広範な地域で使用されているビーズ。
素材や飾り方、用途や役割に着目し、人類の多様な営みをビーズを手がかりにさぐった。

第466回「第二言語としての日本手話――実感・体感的手話言語案内」【手話言語学研究部門プロジェクト関連】

2017年５月６日　講師　飯泉菜穂子　参加人数　32名

音声言語とは異なる音素・語彙・文法をもつ、独立した言語の手話言語。
講師の経験に基づき、手話言語とはなにか、手話言語話者の文化について紹介した。

第467回「人類史のなかの遊牧」【みんぱく名誉教授シリーズ】

2017年６月３日　講師　松原正毅（民博名誉教授）　参加人数　48名

従来、遊牧の起源と動物の家畜化は同一視されてきたが、実際は家畜化に先行する営みであると考えることができる。遊牧の起源とともに、人類におけるその意味を考えた。

第468回「文明の転換点における博物館」【新館長就任記念】

2017年７月１日　講師　吉田憲司　参加人数　54名

人類の文明はいま、大きな転換期を迎え、異なる文化を尊重しつつ、ともに生きる知恵が求められている。このような時代における博物館の役割について考えた。

第469回「民族学で解く千里ニュータウンと大阪万博」【みんぱく名誉教授シリーズ】
2017年８月５日　　講師　中牧弘允（吹田市立博物館長・民博名誉教授）　　参加人数　51名
千里ニュータウンの住民の多くは、60年代に市内より移住してきた。千里丘陵における新旧住民の文化的差異に着目し、70年万博の開催、万博記念公園の意味を考えた。

第470回「シーボルト父子が集めたアイヌ文化」
【開館40周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」関連】
2017年９月２日　　講師　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹、民博名誉教授）
参加人数　108名
19世紀に日本を訪れたシーボルト。彼が収集したアイヌ資料は、質、量ともに当時の日本を知る貴重な資料となる。シーボルト親子２代にわたるアイヌ資料収集を紹介した。

第471回「カナダ先住民と建国150年――北西海岸先住民を事例に」
【開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」関連】
2017年10月７日　　講師　岸上伸啓　　参加人数　40名
カナダ建国以来いまに至るこの間は、先住民にとって、国家と政治的な対立と妥協を繰り返した150年であった。北西海岸先住民を例に先住民にとっての150年を振り返った。

※2017年11月は開館・発足40周年事業「みんぱく大集合」を開催したため、友の会講演会は実施しなかった。

第472回「巨石の島に生きる――インドネシア・ニアス島の家屋と集落」【第90回民族学研修の旅関連】
2017年12月２日　　講師　佐藤浩司　　参加人数　47名
島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋がつくられてきたインドネシア。ニアス島を例に、インドネシアの伝統家屋、建築文化財が直面する課題について考えた。

第473回「タヒチとイースター島――楽園と崩壊の対比」
2018年１月６日　　講師　印東道子　　参加人数　64名
ポリネシアの島々は10世紀頃まで無人島であった。限られた環境下で、楽園とまで呼ばれた有人島環境をつくりあげたポリネシア人の知恵を、タヒチを例に紹介した。

第474回「日本文明の夜明け――梅棹忠夫と三内丸山遺跡」【みんぱく名誉教授シリーズ】
2018年２月３日　　講師　小山修三（民博名誉教授）　参加人数　74名
三内丸山遺跡の発見は、縄文時代の社会の在り方の再考を促した。梅棹初代館長は、三内丸山を日本文明の黎明期に位置づけた。この仮説とその後の研究への影響を紹介した。

第475回「藤戸竹喜の世界を深く知るために」
【開館40周年記念企画展　アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命（いのち）
――木彫家 藤戸竹喜の世界」関連】
2018年３月３日　　講師　齋藤玲子　　参加人数　57名
熊を原点とする木彫家 藤戸竹喜の作品世界を、本人から聞き取った幼少期、青年期の話を交えて紹介した。

●国立民族学博物館友の会 東京講演会（協力：国立民族学博物館）
◎東京：モンベル御徒町店
第118回「モンゴル高原における遊牧民の遺産」【第89回民族学研修の旅関連】
2017年５月13日（土）　講師　小長谷有紀　　参加人数　54名
遊牧は、動物を多角的に利用し、移動によって随時、自然や社会の変化に対応する柔軟性を備えた生活様式である。史跡をたよりに平和構築に励んだ遊牧民の暮らしを考えた。

第119回「文明の転換点における博物館」【新館長就任記念】
2017年７月15日（土）　講師　吉田憲司　　参加人数　51名

人類の文明はいま、大きな転換期を迎え、異なる文化を尊重しつつ、ともに生きる知恵が求められている。このような時代における博物館の役割について考えた。

第120回「巨石の島に生きる――インドネシア・ニアス島の家屋と集落」【第90回民族学研修の旅関連】
2017年11月23日(木・祝)　講師　佐藤浩司　参加人数　38名
島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋がつくられてきたインドネシア。ニアス島を例に、インドネシアの伝統家屋、建築文化財が直面する課題について考えた。

第121回「カザフの食と儀礼――ひとの一生を彩る草原の恵み」【北東アジア地域研究拠点関連】
2018年1月27日(土)　講師　藤本透子　参加人数　44名
広大な草原で暮らすカザフ人。遊牧民であった伝統を受け継ぐ彼らの食事は、乳製品や肉料理の豊富さが特徴である。カザフ人の食文化とそこに込められた想いを紹介した。

●みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）
第67回　開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」
2017年4月1日(土)　講師　池谷和信　参加人数　37名

第68回　開館40周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」
2017年9月2日(土)　講師　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹、民博名誉教授）
参加人数　80名

第69回　開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」
2017年10月7日(土)　講師　岸上伸啓　参加人数　35名

第70回　開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命（いのち）――木彫家 藤戸竹喜の世界」
2018年3月3日(土)　講師　齋藤玲子　参加人数　50名

●体験セミナー（協力：国立民族学博物館）
第75回　「三次の鵜飼漁見学と広島県の民俗芸能に出会う」
【シリーズ：川とともに生きる――日本の鵜飼探訪 第2弾】
実 施 日　2017年7月22日(土)～23日(日)［2日間・広島県］
講　　師　卯田宗平
葉杖哲也、田邊英男（以上、広島県立歴史民俗資料館学芸員）
参加人数　25名
日本国内11箇所でおこなわれている鵜飼漁。生業鵜飼の名残の伝える三次鵜飼を見学し、あわせて日本有数の神楽どころである広島県北部の民俗芸能について理解を深めた。

第76回　「世界的嗜好品、コーヒーを知る――発祥の地、アラブのコーヒー文化とUCCコーヒー博物館見学」
（協力：UCCコーヒー博物館）
実 施 日　2017年10月18日(水)［兵庫県神戸市］
講　　師　西尾哲夫
会　　場　UCCコーヒー博物館、UCC上島珈琲株式会社本社
参加人数　22名
レクチャーで、発祥の地アラブのコーヒー文化に着目するとともに、ブレンド体験、展示見学をとおして、世界各地の人びととコーヒーとの多様なかかわり方を垣間みた。

第77回　「植物から博物学の世界を知る――東京大学総合研究博物館見学」（協力：東京大学総合研究博物館）
実 施 日　2018年2月24日(土)［東京都文京区］
講　　師　大場秀章（東京大学総合研究博物館特招研究員、東京大学名誉教授）
池田　博（東京大学総合研究博物館准教授）

会　　場　東京大学総合研究博物館
参加人数　30名
江戸時代の標本や本草図譜の解説や、現代の標本の管理方法などを見学することで、江戸時代から現代に続く植物学の世界について理解を深めた。

●民族学研修の旅（協力：国立民族学博物館）
第89回　「モンゴル、遊牧の民に出会う――揺籃の地オルホン川上流域と草原都市ウランバートルを訪ねる」
実 施 日　2017年８月７日（月）～14日（月）［８日間・モンゴル国］
講　　師　小長谷有紀
　　イチンホルローギーン・ルハグワスレン（モンゴル科学技術大学教授）
参加人数　21名
遊牧民の興亡の歴史を物語る史跡が点在するオルホン川上流域、国の人口の半数が暮らす首都ウランバートルを訪ね、歴史背景とともに遊牧民の暮らしについて理解を深めた。

第90回　「インドネシア、ニアス島とスマトラ島北部の住まいを訪ねる」
実 施 日　2018年３月10日（土）～18日（日）［９日間：インドネシア］
講　　師　佐藤浩司
参加人数　25名
インドネシアの多様な伝統家屋には配置や方位、装飾などに人びとの世界観をみることができる。ニアス島とスマトラ島を訪ね、住居見学とともに人びとの暮らしに親しんだ。

●午餐会（協力：国立民族学博物館）
第202回　「文明の転換点における人類学、これからのみんぱく」
2017年７月６日（木）
講　　師　吉田憲司
参加人数　20名
会　　場　ホテル阪急インターナショナル
人類の文明はいま、大きな転換期を迎え、異なる文化を尊重しつつ、ともに生きる知恵が求められている。このような時代における国立民族学博物館の役割について考えた。

●国立民族学博物館開館・友の会発足40周年記念事業「みんぱく大集合」
2017年11月４日（木）
会　　場：国立民族学博物館 講堂他
主　　催：千里文化財団
共　　催：国立民族学博物館
記念対談：
【挨拶】小山修三（千里文化財団理事長）
【対談】「文化人類学と霊長類学――人類文化の普遍性をさぐる」
　　講　　師：吉田憲司、山極壽一（京都大学総長）
　　参加人数：413名
友の会会員限定見学会（４グループ／午前・午後の２部にわけて各会場で実施）
A）開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」
　　講　　師：岸上伸啓
　　参加人数：午前16名、午後６名
B）開館40周年記念新着資料展示「標 交紀（しめぎゆきとし）の珈琲（コーヒー）の世界」
　　講　　師：菅瀬晶子
　　参加人数：午前６名、午後10名
C）収蔵庫見学
　　講　　師：園田直子、西澤昌樹
　　参加人数：午前22名、午後21名

D） 梅棹資料室
講　　師：飯田　卓
参加人数：午前14名、午後14名
研究者と友の会会員の交流会
参加人数：33名

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会機関誌）
協　力：国立民族学博物館
編集・発行：千里文化財団
160号：特集「沖 守弘が見たインド」ほか（2017年４月25日発行）
161号：特集「千里から考える ニュータウンとそのゆくえ」ほか（2017年７月25日発行）
162号：開館40周年特集「民博の展示がめざすもの」ほか（2017年10月25日発行）
163号：特集「ヒマラヤの吟遊詩人 ガンダルバの現在」ほか（2018年１月25日発行）

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム「オーストラリアのブーメランをとばそう」
2017年７月26日（水）
実施場所：南山城村京のまなび教室「Yaまなびclub」（相楽東部広域連合南山城小学校）
参加人数：16名（１～６年生：12名、教員：４名）
2017年８月２日（水）
実施場所：やわた放課後学習クラブ（八幡市立さくら小学校）
参加人数：13名（５～６年生：10名、教員：３名）

●巡回展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
名　　称：石川県立歴史博物館 夏季特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
主　　催：石川県立歴史博物館、国立民族学博物館、千里文化財団
開催期間：2017年７月22日（土）～９月３日（日） 44日間
会　　場：石川県立歴史博物館〈〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1〉特別展示室
展示点数：355点
企　　画：国立民族学博物館　国立新美術館　日本文化人類学会
入場者数：4,883人
関連企画：
講 演 会：「イメージの力をさぐる――国立民族学博物館から」
講　　師：吉田憲司
日　　時：７月23日（日）13：30～15：00
会　　場：石川県立歴史博物館ワークショップルーム
共　　催：国立民族学博物館友の会
聴 講 者：40名（無料）

ワークショップ 「光織りなす布　インド伝統のミラー刺繍を体験！」
講　　師：上羽陽子
日　　時：８月５日（土）10：00～15：30
会　　場：石川県立歴史博物館ワークショップルーム
対　　象：一般
参 加 者：20名（有料500円）

ワークショップ「神様、妖怪はどんな顔？ 世界にひとつだけの仮面作り」
日　　時：８月６日（日）、13日（日）、20日（日）、27日（日） ９：00～12：00
会　　場：石川県立歴史博物館　歴史体験ひろば
参 加 者：合計 238名（無料）

ワークショップ「アマメハギの仮面にハンズオン！」
日　　時：８月30日（日）、11月20日（日）　13：30～
会　　場：石川県立歴史博物館　歴史体験ひろば
参 加 者：合計 380名（無料）

展示解説
日　　時：８月６日（日）、20日（日）　13：30より30分程度
会　　場：石川県立歴史博物館特別展示室・企画展示室
参 加 者：６日18名、20日27名（無料〈特別展観覧券要〉）

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力
会　　場：あべのハルカス近鉄本店ウィング館９F「スペース９」（大阪市阿倍野区）
主　　催：産経新聞社
共　　催：近鉄文化サロン、スペース９
特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

2017年４月12日（水）　「南太平洋の文化遺産――宣教師ブラウンとそのコレクション」
講師：林　勲男　　参加人数：28名
2017年４月19日（水）　「太平洋の探検家――朝枝利男の探検と生涯」
講師：丹羽典生　　参加人数：29名
2017年５月10日（水）　「マヤ民族とフェアトレード・チョコレート」
講師：鈴木　紀　　参加人数：35名
2017年５月24日（水）　「イタリアの家族と結婚」
講師：宇田川妙子　　参加人数：33名
2017年６月14日（水）　「ドイツのパンを味わう」
講師：森　明子　　参加人数：46名
2017年６月28日（水）　「豊かに老いる社会――アメリカやヨーロッパの事例から」
講師：鈴木七美　　参加人数：36名
2017年７月12日（水）　「セネガルのガラス絵とその変遷――歴史と生活を記憶する」
講師：三島禎子　　参加人数：25名
2017年７月26日（水）　「エチオジャズの世界的展開」
講師：川瀬　慈　　参加人数：31名
2017年９月13日（水）　「南アジアの人びとの移動を言語に見る」
講師：吉岡　乾　　参加人数：45名
2017年９月27日（水）　「インドの日常茶飯――食事と娯楽」
講師：三尾　稔　　参加人数：43名
2017年10月11日（水）　「インドネシアの伝統芸能ワヤン」
講師：福岡正太　　参加人数：25名
2017年10月25日（水）　「ベトナム、黒タイのいろり」
講師：樫永真佐夫　　参加人数：38名
2017年11月８日（水）　「誰がために涙をためる――涙壺をめぐる文化考」
講師：山中由里子　　参加人数：19名
2017年11月22日（水）　「中東の宗教的マイノリティ」
講師：菅瀬晶子　　参加人数：31名
2018年１月10日（水）　「みんぱくの台湾研究」
講師：野林厚志　　参加人数：44名
2018年１月24日（水）　「マイナス30度の世界に生きる――狩猟民チュクチの暮らし」
講師：池谷和信　　参加人数：30名
※会場をあべのハルカス会議室に変更。

2018年２月14日（水）　「伝承される民族衣装のいま――中国の多様性とファッション」
講師：横山廣子　参加人数：30名
※会場をあべのハルカス会議室に変更。
2018年２月28日（水）　「シルクロードのオアシス都市――ウズベキスタンの発掘調査から」
講師：寺村裕史　参加人数：39名
2018年３月14日（水）　「日本の鵜飼文化」
講師：卯田宗平　参加人数：22名
2018年３月28日（水）　「アートと人類学のあいだ――私の履歴書、人文科学の今」
講師：吉田憲司　参加人数：28名

●そのほか、普及活動

① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布
あいさつスタンプ（フランス語・ドイツ語・オランダ語「こんにちは」「ありがとう」）
アイヌ文様マグカップ、仮面Ｔシャツ開館40周年記念バージョン、開館40周年記念仮面手拭い
仮面キャンバスバッグ（３色）、仮面マスキングテープ（武庫川女子大学の学生とのコラボ商品）
特別展「太陽の塔からみんぱくへ」関連グッズ：クリアファイルA4　１種、EEM資料クリアファイルA5　４種、EEM資料オリジナルT-シャツ　２種、EEM資料オリジナルパーカー　１種、EEMオリジナル測量野帳　１種

② 2018年国立民族学博物館オリジナルカレンダー「みんぱくわん！だふる」の制作及び頒布

③ 外部連携事業
巡回展「イメージの力」での委託販売
・会　場：石川県立歴史博物館
・期　間：2017年７月22日（土）～９月３日（日）

補足国立民族学博物館開館・友の会発足40周年記念事業として協力、実施した主な内容

1）2017年度ウィークエンド・サロンを共催で開催し、当日運営をおこなった。
2）機関誌『季刊民族学』開館40周年記念号を編集発行した。
（表紙には「国立民族学博物館開館40周年、友の会発足・本誌創刊40周年」を記載）
3）開館40周年式典・祝賀会の開催協力をおこなった。
4）上記式典での記念品として、本館展示の新版『展示案内』の編集協力、手拭いの企画及び製作をおこなった。